

書籍目録に見られる江戸中期の 流通医書

平馬直樹

筆者は、第八十七回総会において、江戸時代に刊行された書籍目録を資料に、一七世紀後半の流通医書の傾向を調査し報告した。今回は、一八世紀に刊行された三点の書籍目録を資料に江戸中期の流通医書の傾向を調査した。

書籍目録には、部類わけ目録の諸本と伊呂波わけ目録の諸本とがある。前者は京都の、後者は江戸の出版業者によって刊行され、系統が異なり、編集方針が異なるが、いずれも流通する刊行書を網羅的に収録している。前者は、その刊行時期から前期と後期に分けられる。今回は、後期部類わけ目録から江戸中期の医書の出版傾向を調査した。

資料として用いたのは次の三点で、いずれも慶応大学斯道文庫編『江戸時代書林出版書籍目録集成』収録本を用いた。

A 『新撰書籍目録』四卷四冊。文照軒柴橋編、享保一四(一七二九)年、京都、永田調兵衛刊。

B 『新增書籍目録』三卷三冊。文昌軒柴橋編、宝暦四(一七五四)年、京都、永田調兵衛刊。

C 『大增書籍目録』三卷三冊。博古堂南窓編、明和九(一七七二)年、京都、武村新兵衛刊。

前回報告した元禄五(一六九二)年刊の『広益書籍目録』は、江戸前期からの流通出版書をほぼ網羅し、後年まで摺印を繰り返して、重用され、以後部類わけ目録の刊行は途絶していた。その間、元禄を境として学術・文芸界にも新しい潮流が起こっており、新たな書物が次々と出版されている。また、享保七年の出版条例などにより書物問屋の組織が進み、出版物にたいする統制も強まった。そのような変化のもとに、享保一四年に至ってようやく新たな目録の刊行が実現した。それがAである。

前期部類わけ目録諸本がそれまでの刊行書を網羅したのと異なり、Aは元禄以前の刊本はほとんど省かれ、『広益書籍目録』以後の新刊書を主としている。すなわち元禄五年からの三七年間の出版傾向を反映していると考えられ

る。BはAと同じ出版元から出され、A以後の新刊書を収録している。従って一七二九～五四の二五年間の傾向を反映している。Cは出版元は異なるが、Bの編集方針が踏襲され、B以後の新刊書が収録されている。従って一七五四～七二の一八年間の傾向を反映している。すなわちこの三書によって元禄期から明和年間までの書物問屋に流通する出版物を切れ目なくつかむことができ、それぞれの時期の出版傾向を探ることができる。

Aの医書門は一八九点を収録する。一年間で五・一点の割りである。このうち漢籍医書の翻刻はおよそ三割で、江戸前期と異なり和医書が優位を占めている。Bの医書は一一点で、年平均四・四点。漢籍医書は二四点で二割強とさらに減っている。Cの医書は一五四点、年平均八・六点と増加。漢籍の翻刻は一五点、わずか一割と激減している。時代が下がるほど新刊書は和医書が中心となっていることがわかる。

漢籍医書はAでは、江戸前期と異なり古典典籍の翻刻は影を潜め、明・清の実用的医書が多数を占める。主な著者は、張景岳が七点、陳三農が四点、汪詡菴と喻嘉言が三点

などである。張景岳の書は、Bでも三点、Cで二点収録されており、『景岳全書』を分冊にして刊行したものが多く、景岳の日本の漢方に及ぼした影響は再検討されねばならないと思われる。

Bの漢籍医書の著者は、景岳の他、張路玉が四点を占め第一位である。『傷寒緒論』など傷寒論関係の書である。他に朱肱の『傷寒類証活人書』『傷寒百問』など、Cでは『傷寒溯源集』『傷寒五法』など傷寒に関する書が見られるが、それほど増大しているわけではない。むしろ注目すべきは、Aでは影を潜めた古典典籍が、少数ながら再び見られる点である。Bの『外台秘要』『肘后方』『本事方』、Cの『千金翼方』『鬼遺方』などである。

和医書は、Aでは岡本一抱の著作が二一点と多く、他に下津春抱が五点、名古屋玄医、貝原益軒、藤井見隆が四点などである。その内容は本草書、傷寒、痘疹、小児科、食養生、鍼灸など多方面に及ぶが、全体的に実用的、啓蒙的傾向にある。Bも同様の傾向にあるが、Cでは古医学の興隆に対応して、傷寒論関連書が増大し、香川修庵、吉益東洞ら古方家の著作も目立っている。また石崎朴庵『飲病

論』、稲葉良仙『三焦營衛論』などの理論的医書も見られ、出版点数も増大している。このことから一八世紀中葉に、活発で多方向な医学の日本的展開が起こっていることを読み取ることも可能であろう。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所、医史文献研究室)

『保嬰三方』について

広 田 曄 子

『保嬰三方』の著者は波多野三柳で、父祖の代より山陽の浜で医業を営む家系の出身であった。三柳は自序の中で、自分は古方を擁護し、古方を基準として治療に当たったと述べている。したがって古方派に属するといえよう。『保嬰三方』が著されたのは吉益東洞の活躍する以前で、香月牛山の活躍した時代と一致する。『保嬰三方』について、その歴史的位置づけをするために若干の考察を試みた。

まず、その内容であるが、はじめに引用書目を記している。江戸時代の小児科専門書の中では下津寿泉の『古今幼科摘要』(二六二九年)にもはじめに引用文献の記載がある。『保嬰三方』には七三の引用書を挙げているが、いずれも中国の書物である。本文中にも日本の医書の引用はない。これは江戸時代後期に著された小児科関係の記載と比べると大きな違いである。つきに、記載の順序であるが、『保